御曹司の淫執愛にほだされてます

## 第一章　過去をつれてくる雨

絡んだ視線。

はじめに込み上げたのは、懐かしさだった。過去の恋慕がよみがえったかのように、わずかに気持ちが浮き上がった。

しかしそれは五秒と経たず突き落とされる。何事もなかったように逸(そ)らされた目と、左手の薬指に光る指輪によって。

堅苦しいスーツを着た男たちがなにやら話をしながら横を通り過ぎていく。廊下のはしで立ち止まっている和香(のどか)に気をとめることはない。彼らの真ん中にいたのは宗像総司(むなかたそうじ)――この会社社長の御曹司であり、五年間会うことのなかった昔の恋人だ。

今、彼の目は確かに和香を捉えた。けれど表情はぴくりとも動かなかった。

気がつかなかった？

男たちの話し声は徐々に背後へ遠ざかっていく。和香はその場に立ち尽くしたまま、一歩も踏み出すことができない。

「私、どうして――」
こんなに衝撃を受けているのだろう。こんなの、まるで傷ついているみたいじゃないか。
彼が結婚していることは分かっていた。
無視されたのはきっと、周りに人がいたから。
今さら自分がこんなふうに揺さぶられる理由なんてないはず。なのに、大切なものが損なわれてしまった気がするのは、どうしてだろう。
「どうしたの、倉田さん。そんなところに立ち止まって」
はっと顔を上げると、廊下の先で元同僚の森川がこちらを振り返っていた。
仕事で来ていることを思い出し、和香は慌てて気を引き締める。
「なんでもない。ごめんなさい、待たせちゃって」
憂慮を振り払うように顔に笑みを貼りつけた。
幸い森川は数歩先を歩いていたので、二人の間にある角を曲がってきた総司の存在には気づかなかったようだ。変に気遣われる心配がないことに安堵した和香は、彼のあとについて会議室に入り、打ち合わせに集中しようとした。
けれど、森川の背後に見える窓の景色に気がついたら、頭の片隅で勝手に呼び起こされていく思い出を止めることなんてできなかった。
ああ、あの日と同じ――



不穏に垂れ込める灰色の雲から細い糸が降り注ぐ。
ガラスの向こうに見えるのは、静かな静かな雨だった。

二人で会った最後の日も、和香は雨を眺めていた。
カフェの店内にはBGMがかかっておらず、静かな水音を楽しめるように店員があえてそうしたのかもしれない、などと考えていた。
最初に切り出したのは総司だった。
『別れよう』
向かいに座った彼の声は落ち着いていた。穏やかで、雨の音にとてもよく似合っていた。
『うん』
和香の声も同じ。雨の中に溶け込んでいきそうなほど静かに凪いでいた。
二人は新卒で入社した株式会社宗像百貨店の同期だった。
好意をいだいた最初のきっかけは、仕事の悩みを聞いてもらったことだ。
――大丈夫だ。君のいいと思うようにすればいい。
デザイナーでありながらすぐ自信をなくす和香は、何度この言葉で勇気づけられたか知れない。
総司自身は力強いリーダーシップで仕事を推し進めるタイプで、自分と全く違う彼を和香は尊敬していた。けれど、彼だって他人に見せないだけで、人並みに繊細な部分を抱えているのだ。それ

を知ったとき、止めようもないくらい愛情は膨れ上がっていた。
彼の人となりを知るほどに、心が抗いようもなく惹きつけられる。それは総司も同じだったらしい。御曹司という立場に尻込みしなくもなかったが、歯止めにはならなかった。
これほど人を愛することはきっともうない。それくらい互いを想い合っていたし、将来だって意識していた。けれど、結局その関係は一年半ほどで幕を下ろすことになった。
こんなに静かな別れってあるんだ。
テーブルの上のコーヒーは、一度も口をつけられないまま冷たくなっている。ダークブラウンの水面には、同じくらい暗い顔をした自分が映っていた。
別れがつらくないなんてこと、あるわけがない。愛情は薄れるどころか強まるばかりで、互いがいない未来なんて考えられなかった。たくさん苦悩したし、葛藤もした。これはその結果。
彼はすでに覚悟を決めていた。出ていった長男の代わりに社長の後継者として立ち、いろんな責任や枷を負っていく覚悟を。決められた結婚もその一つだった。
大企業や名門の家というのは、個人の感情とは異なる理屈で動いている。社会に出てようやく二年になろうかという二人に、それに対抗する力も知恵もあるはずがない。
ただ拒みつづけ、その分だけ疲弊した。それでも離れたくないなんて嘆く気力は残されていなかった。
もう、終わるしかない。



互いにはっきりと理解していた。
『さようなら』
別れを口にしたとき、総司の目が潤んで見えた。目だけでなく、顔も、髪も、肩も、テーブルや、店内まで。
そのとき和香の瞳に映ったのは、ゆらゆらと揺らいでぼやける世界だけだった。
涙なんてとうに枯れたと思っていたのに。
彼がこのときどんな表情をしていたのか、今でも分からない。
二人の最後の思い出は、穏やかに降りしきる水の音だった。

苦しい別れのあと、和香は会社を辞めた。失恋の痛みだけでなく、政略結婚によって引き裂かれた御曹司とその恋人の噂が会社のあちこちで囁かれたこともあり、とても居続けられる状態ではなかったのだ。
ちょうどその頃、親友がアンティークショップを始めようとしていたため、和香はそれに共同経営者として参加し、東京を離れた。二度と総司にも会社にも関わることはないと思っていた。
なのに、また顔を合わせることになるなんて。
メモを書き入れた書類をぱらぱらと見返している森川から、和香はゆるりと視線を外す。彼の背後では相変わらず雨が降りつづいていた。

退職して五年。細々とやりとりを続けてきた元同期の彼から、企画のために話を聞かせてほしいとお願いされたのはつい先日のことだ。会社を辞めて以降、アンティークショップの経営で試行錯誤を重ねてきたが、その経験が前職の同僚の役に立つとは思わなかった。近くの支社に彼が異動してきていたこともあり、和香はその依頼を承諾した。

ひととおりの確認を終えた森川が力強く頷くのを目にして、和香はホッと息を吐く。

「ありがとう。倉田さんが相談に乗ってくれたおかげで、なんとか企画が形になりそうだよ」

「よかった、役に立てて。宗像百貨店の催事でアンティークを取り扱うのって初めてじゃない？たくさんお客さんが来るといいけど」

「その前に、企画会議で最終のゴーサインをもらうっていう難関がまだ残ってるけどね」

テーブルの上でとんとんと書類をそろえながら森川は苦笑する。けれど、企画はきっとすんなり通ってしまうに違いない。同期だった和香は彼の優秀さをよく知っていた。

「森川ならいけるよ。私に手伝えることがあったら言ってね」

「ありがと」

手元の企画案に再度目を落とし、和香は頬を緩める。記載されているのは、会社が経営するデパートの催事フロアに骨董品店を集めて行うアンティーク販売イベントだ。アンティークのよさを多くの人に知ってもらういい機会になるだろう。外部の相談役としてしか関われないことが多少残念ではあるけれど。



「ほんと倉田さんが引き受けてくれて助かったよ。ごめんね、会社に呼んじゃって。支社とはいえ、あんまり来たくなかったでしょ」

「それは……」

彼があまりにも申し訳なさそうな顔をするから、和香はなんと答えていいか分からなくなる。

総司を除けば、森川は同期の中で一番親しかった。当然、和香と総司の出会いから別れまでを間近で見ている。和香がわざわざ本社のある東京から離れた地方都市にショップを構えたのも、総司から物理的な距離を置くためだと察しているだろう。

「否定は……しない。けど、支社だから、彼に会うこともないだろうし、手伝えることがあるのは嬉しいよ」

嘘でないことを証明するように微笑みを浮かべる。

すでに総司とばったり出くわしてしまったことは伏せておいた。本社勤務であるはずの彼が支社を訪れていることをおそらく森川は知らない。そうでなければ和香を呼ぶわけがない。ならば、黙っておいたほうがいらぬ心配をかけずに済む。

入社してからほんの二年で慌ただしく辞めてしまったせいで、この会社には世話になった人も迷惑をかけた人もたくさんいる。もちろん目の前の彼もその一人だ。その恩返しがほんの少しでもできるならしたかった。

しかし、森川はどうにも納得しかねたようだ。

「そう……？　なんだか、元気がなさそうに見えたから。ここに呼んだのは失敗だったかと思ったんだ」
微笑みが強ばりそうになる。
やっぱり隠せないなあ……
彼は本当に人をよく見ている。表情の変化が乏しくて感情が分かりにくいと言われる和香だが、昔から森川は不思議と見抜いてしまう。
けれども今は、正直な気持ちを吐露するわけにいかない。自分自身もまだ、突然の再会で湧き起こった感情を整理しきれていないのだから。
「久しぶりだから緊張してるだけだよ」
「なら、いいけど」
困ったようにほんの少し眉尻を下げて、たぶん彼は和香の誤魔化しも分かっている。それでいてなにも言わないでくれるのがありがたかった。

打ち合わせはそのまま終わった。久しぶりだからゆっくり話したいという森川の食事の誘いを、予定があるからと丁寧に断り、和香は一人でエントランスフロアに下りた。
待ち合わせの時間にはまだ余裕がある。さてどう時間をつぶそうか。自動ドアのガラス越しに、いまだやむ気配のない雨をぼんやりと見つめる。



次の予定は、恋人との約束だ。総司のことは言えないな、と自嘲する。過去の恋を思い出にして次の相手に向かっているのは和香も同じだ。違うのは、紙切れ一枚、指輪一つのあるなしでしかない。なのに、勝手に置いていかれたような気持ちになるのは筋違いというものだ。
たぶん、自分は寂しいのだと思う。
かつて一つに重なっていた想いが、今は別々の方向を向いているということ。二人で積み重ねた思い出を同じ気持ちで分かち合うことはもうできないということ。
それを突然思い知って動揺しているだけ。
でも、実際それは大したことではないのだ。
想いが離れてしまっても、気持ちが冷めてしまっても、過去は変わらない。一番に大切な人と確かに想い合って、宝物のような時間を過ごしたことは、揺るぎない事実だ。
たとえ未来がなくても――いや、ないからこそ。全力で散った愛の記憶は色褪せることなく、尊い輝きを帯びる。過去が動きだすことは二度とない。思い出は永遠に美しいまま。それは和香にとって慰めであり、幸福とすら言えることだった。
だから、束の間の邂逅など忘れてしまおう。そうして美しい思い出だけを大切にして生きていけばいい。
そうやって胸にわだかまる感情を振り切ろうとした。
なのに、不意に背後からかかった声を聞いて、つくづく意地悪な現実を恨みたくなった。

「どうして君がここにいるんだ」
どうしてなんて、こちらが尋ねたいくらい。
少し低めのハスキーボイス。五年ぶりなのにすぐに分かってしまうその声は、まさしく彼のものだった。
「……用事があったから」
一拍置いて和香は振り返った。
少し離れたところに総司が立っている。高めの身長。見上げる角度をごく自然に身体が思い出す。あの頃よりも少しがっしりしたかもしれない。彫りの深い男らしい顔立ちは相変わらず。
見蕩(みと)れそうになって、慌てて観察するのをやめた。
「仕事で来ていたのは知ってる。ミーティングフロアでさっき見かけた」
「私がいることに、気づいてたの？」
和香が驚きをにじませると、総司は不思議そうに眉を上げた。
「目が合っただろ？」
表情一つ変えなかったくせに。
反射的に浮かんだ文句は、きっと口にすべきではない。和香の瞳は今なお彼の手の中で光るものを映していた。
「……結婚、したんだよね」



「ああ」
総司は自分の左手を確かめるようにちらりと見た。その仕草に胸がちくっとする。
「おめでとう。すごく、今さらだと思うけど」
「……ああ」
短い返答の奥には、いったいどんな感情があるのか。五年ぶりの和香に分かるはずもなかった。自分と別れてから彼と奥さんがどんな関係を築いてきたかなんて、想像もつかないし、踏み込んで聞きたいとも思えない。うまくいっていても、いなくても、微妙な気分になることは分かりきっている。
和香にできるのは、ただ和やかに当たり障りのない会話を続けることだけだった。
「久しぶりに会ったけど、元気そうで安心した」
「君も。退職してから店を開いたとは聞いていたが、詳しいことは分からなかったからな」
「うん、まあ……なんとかやってる」
「ならよかった」
総司がなにかを思案するようにやや視線を下げる。途切れた会話が気まずい空気を作り出した。
昔はこんなふうに互いが黙っても全く苦にならなかったのに。
些細ななにかに気づくたび、寂しいような虚(むな)しいような気持ちが少しずつ胸の内に降り積もっていく。さっさと会話を切り上げたほうがいいのかもしれない。和香が立ち去るタイミングを窺(うかが)って

いると、彼の表情がにわかに真剣な色を帯びた。
「君は……もう二度と、俺の前に姿を現すことはないと思っていた」
持ち上げようとしていたつま先の動きがぴたりと止まる。そして元の場所に戻った。
「だから、支社とはいえ、社内で君を見かけて驚いた」
総司の視線がすっと上がり、和香を捉える。その眼差しの真っ直ぐさに、身体を縫いとめられた気がした。
「そんな……そんなわけ、ない。退職はしたけど、用があれば会社にだって顔くらい出すもの」
「そうみたいだな……」
和香は自分の心が見透かされないことを祈った。
本当は会いたくなかった。会うつもりもなかった。
和香にも総司にももう別の相手がいて、互いに別の未来を歩みはじめている。二人の道が交わることは永遠にない。顔を合わせたところで、失った未来を思って寂しくなるだけだ。過去は取り戻せない。
森川に頼まれて、支社だから平気だろうと油断してしまったけれど、こんな失敗は二度としない。
だから、総司の顔を見るのもこれで最後。今を穏便にやりすごせば、何事もなかったように日常に戻る。
――そのはずでしょう？



「和香、俺は――」
総司がなにかを言いかけたとき、和香の懐でバイブレーションの唸り声が上がった。
二回に分けて振動したあとあっさりと沈黙したそれは、おそらくメッセージの着信だ。すぐに確認すべきか悩んでいると、どうぞとでも言うように総司の手のひらがこちらを向いた。
「仕事の連絡だったら早く返したほうがいいだろ」
「……ありがと」
手早くスマートフォンを取り出してみると、メッセージは交際相手の矢野匠からだった。内容は端的な一文。
『ごめん、今日は会えなくなった』
自分の顔から表情が抜け落ちた気がした。
彼とは仕事の関係で知り合ったため、プライベートでも連絡は事務的になりがちだ。互いに自営業だから、突発的に用事ができる事情も理解はできる。
だけど、できれば今日だけは……会いたかった。この突然の再会に揺さぶられて不安定になった心を、恋人の顔を見て落ち着けたかった。
「なにかあったのか？」
怪訝そうに問いかけられて、はっと我に返る。
「な……なにも。大したことじゃ、なかった」

笑おうとして無様に頬が強ばり、咄嗟に俯く。そして失敗したと思った。今の動きは不自然だった。絶対に動揺を悟られた。

硬い床を歩く控えめな足音がして、二人の間にあった距離が詰められる。間近に迫った相手の気配に緊張が高まる。

スマートフォンを握りしめたまま和香が身動きできずにいると、いきなり頬に男の手が触れて顎を持ち上げられた。

思ったよりも近くに総司がいたことにどきりとする。後ずさろうとするが、黒髪の下からのぞく鋭い目線で制された。至近距離で見つめ合う。彼の瞳の奥に、熱いものが見えた気がした。

「男から？」

「っ……そんなの、あなたに関係ない」

「和香」

「離してっ」

手荒くその腕を払い除け、後ろに下がる。これ以上近づかれたら、冷静さを保っていられないと思った。

「のどか……？」

かすかに揺れる声は、彼の戸惑いを表している。まるでこちらの拒絶に傷ついているみたいに。やめてほしい。情のようなものが込み上げそうになる。



和香は気持ちを落ち着かせるためにゆっくりと息を吐いた。

「お願い、やめて。私は今さら、あなたと関わる気はないの」

強い言葉で、はっきりと線を引く。固く握りこまれたこぶしを視界のすみに捉えたけれど、あえて無視した。

やっとここまで立ち直ったのだ。

つらい失恋を乗り越え、普通に恋愛ができるようになるまで、とてつもない時間を要した。この五年間は、ほとんど痛みを忘れるためにあったといっていい。

なかったことにするには思い入れが深すぎて、けれどいつまでも心の真ん中に置いておくには悲しすぎる。ようやく美しい思い出として顧みられるようになったのだ。

なのに、こんなふうに触れ合ってしまったら、心が引き戻されそうになる。

総司は黙り込んで眉根を寄せていた。そんな顔をするのは、彼だってつらかった別れを覚えているからではないのか。自分たちがともにいることは、じわじわとした痛みをかもすだけで、きっとなんのプラスにもならない。

「ごめんなさい。……さよなら」

一方的に告げて、総司に背を向け、オフィスを出た。外はやはり雨が降っている。

別れた日と同じなんて、いやな偶然。

心の中でぼやき、手にしていた傘を広げ、和香は道路に踏み出した。

かつかつかつとヒールが地面を叩く音がする。水溜まりの水が跳ね上がり、靴とストッキングを汚していく。けれど、和香の意識は別のところにあった。

時刻はゆっくりと夜に差しかかり、定時で上がった勤め人たちが街中を賑(にぎ)わしはじめる。きらめく街のネオンと人々のざわめきを眺めながら、和香は先ほどの総司との会話を思い返していた。

はっきりと拒絶したことに後悔はない。穏やかに別れられなかったことが残念ではあるけれど、向こうがそうさせなかったのだからどうしようもない。

向こう――総司は、いったいなにをしたかったのだろう。彼はなにかを言いかけていた。既婚者でありながら、あんなふうに触れてくるのはどういうつもりだったのだろう。

「……もう、終わったことか」

ぽつりとした呟きは雑踏の中にまぎれていく。

今度こそ彼とは二度と会わない。最後が後味の悪いやりとりになってしまったけれど、それこそ忘れてしまえばいい。

人混みの中を歩きながら、大丈夫、大丈夫と胸の内で繰り返した。

通りをひたすらに進むと、やがて駅前にたどり着く。このあたりの中心的なターミナルは、いくつもの路線が乗り入れ、手前に広々としたロータリーを備えている。

このあとの予定がなくなった和香は真っ直ぐ帰宅すべく改札口に向かおうとした。だが、帰宅ラッシュが始まっている駅構内はひっきりなしに人が行き交い、互いに避けつつ進まねばならない。

知らず速くなっていた歩みを緩めた和香は、雑踏の中に見知った顔を見つけ、ぴたりと足を止めた。

向こう側からやってくるのは一組のカップルだ。その片方が、自分のよく知る人物だった。その男は矢野――約束をドタキャンした恋人だった。

どういうこと？　仕事相手と用事で通りかかっただけ？

そんな憶測はすぐに的外れだと分かる。その隣の見知らぬ女性がごく自然な仕草で彼の腕にしなだれかかったのだ。

和香が言葉を失って立ち尽くしていると、こちらの存在に矢野も気がついたようだ。互いの視線が一瞬だけぶつかる。けれど、彼は平然とした様子で傍(かたわ)らの女性へ微笑みを向けた。

「近くに美味しい店があるんだ。予約していないから空いているか分からないけど、どう？」

「いいわね、行きましょう。ごめんね、私が突然会いたいなんて言ったから」

女性は男の腕をさらに引き寄せ、甘えるように頬を預ける。

やめて――喉からほとばしりそうになった叫び声を、和香は寸前で押しとどめた。

楽しそうに行き先を決める会話には、深い仲の男女に特有の親密さが漂っている。彼らが、ただの友人や仕事の付き合いといった関係であるはずがない。

どうして？　矢野さんの恋人は、私じゃないの？

頭の中は混乱でいっぱいだった。

浮気という言葉がふっと浮かぶが、おそらくそれは能天気すぎる思考だ。
こちらのほうが約束は先だったのに、彼女の急なわがままを矢野は優先した。和香に見られていることを分かっていながら弁解しようとする素振りもなく黙殺する。それがなにを意味するか。
呆然と二人を見つめていることしかできない和香の肩を不意に誰かの力強い手が引き寄せた。見上げると、昔よりもいくぶん精悍さを増した横顔がそこにある。
「そうじ……」
どうしてここに。まさか追いかけてきたのか。
彼は前方の男女に鋭い視線を向け、冷たく目をすがめていた。大体の状況を察したのかもしれない。
こんなところを、見られるなんて……
ぽろりと涙がこぼれ、慌てて指先で払う。続けてあふれ出しそうなしずくをぐっと呑み込んだ。
泣いてはダメ。我慢して。
懸命に自分に言い聞かせる。だって、今泣いたら、あまりにもみじめだ。
けれど、もう一度前を向く勇気は持てそうになかった。再び彼らの姿を目にしたら、きっと涙が止まらなくなってしまう。和香にはただ唇を噛んでじっとこらえることしかできない。
するとそのとき、総司の手が肩を優しくとんとんと叩いた。大丈夫、とでも言うように。
「行こう」
図らずも男性二人の声が重なって、二組の男女がすれ違う。その瞬間を、まるでスローモーション



のように感じた。
俯いた視界の中、近づいて遠ざかる革靴。機嫌良さげな女性の声と、それに応じる和やかな声。
矢野が和香に対してなんらかの行動を起こすことはついになかった。
呆気ない幕引き。さよならの言葉や言い訳さえなく、無視という形で切り捨てられた。彼にとって自分はその程度の存在で、それを最後の最後に思い知らされた。
「……っ」
矢野たちが去って十分な時間が経ってから、ようやくほんの少しだけ嗚咽を漏らす。
仕事の相談に親身に乗ってくれた彼を、和香は心から信頼していた。失恋の傷が癒えるまで交際を待ってくれて、だからこそきちんと向き合いたいと真面目に考えていた。こんなふうに裏切るような人ではないと思っていた。
涙のしずくがぼろぼろと落ちていく。公共の場でなんとみっともない。けれど止められない。泣き声を抑えるので精一杯だった。
「かぶっとけ」
総司の低い声とともに頭になにかがかぶせられる。布の感触からスーツの上着だと分かる。彼の優しさに涙の勢いがさらに増した。
「ごめん、総司。ごめん……」
関わるつもりがないとまで言ったくせに、今彼がここにいることに和香は救われている。情けな

いところを目撃されて恥ずかしい思いもあるし、どうして追ってきたのかという疑念もある。けれど、こんな公共の場で一人泣き顔をさらす孤独を感じずに済んだのは、彼のおかげだ。
「いいから、気にするな」
「ごめ……っ」
まともに声を出すことすらままならなくなった和香の腕を引き、総司はどこかに向かって歩きだした。
おそらく衆目のない場所に連れていくつもりなのだろう。傷ついている人を放っておけない、情に厚い性格は昔のままだ。
彼の匂いに包まれたまま、和香は黙ってその大きな手に従った。

背後でドアの閉まる音がしたところで、総司から声がかかった。
「もうかぶってる必要ないぞ」
「……ここは？」
頭を覆っていた上着を取り去り、和香はあたりを見回した。顔を隠していたせいで、どのように移動してきたのかいまいち把握できていない。見たところホテルの客室のようだ。ベッドは一つだが、部屋はゆったりと広い。
「俺が宿泊してるホテル。近かったから連れてきた」



そう、と和香は特に動じることもなく頷く。ほかの男に連れてこられたなら警戒するところだが、相手は総司だ。そういった下心をいだくタイプではない。
回収した上着をハンガーにかけてから、総司は和香をベッドに座らせた。
「しばらく休め。ここなら泣きわめいても問題ないだろ」
目尻を濡らすしずくを指先で拭われて、一度収まっていた涙がまたじわじわと込み上げてくるのを感じた。二人の睦まじい様子が目蓋の裏に焼きついていて、些細なきっかけにも涙腺を刺激されてしまう。
頬を伝った涙がぱたぱたとスカートに染みを作りはじめたところで、顔にタオルを押しつけられた。
「さっきの男が、好きだったのか？」
総司の声音が硬い響きを帯びていた。
「……付き合ってたの。私はそのつもりだったの」
受け取ったタオルで顔をふきながら答える。化粧が無惨なことになっていそうだった。いい大人なのに。きっと総司も呆れている。
ふっと鼻で笑う音が聞こえて、和香は鋭い眼差しを向けた。
「二股なんてされて、馬鹿だと思ってる？」
「いや……その場で男を責めて修羅場になったりしないのが和香らしいと思った。そんなに泣くん

なら、もっと必死ですがればよかっただろ」
「そんなこと、しない。意味がないもの……見苦しいだけ」
和香よりもあの女を優先した時点で矢野の中では結論が出ている。すがりついたところで、引かれこそすれ、気持ちが戻ってくる可能性など万に一つもない。みじめな女が一人取り残されるのがオチだ。
「そういうところだと思うけどな」
和香に足りないのは。
淡々と分かったような口をきかれ、ささくれていた気持ちがはっきりとした苛立ちに変わる。
「どうしてそんなこと、総司に言われなきゃいけないの？　すがったって、無駄じゃない」
「無駄とは限らない」
――無駄、だったじゃない。
思い出すとまた目元が熱を持ちはじめる。
総司だって身をもって経験したはずだ。なのに、どうして否定するようなことを言うのだろう。
「私は……誰かを想う綺麗な気持ちが、醜く歪んでいくのに耐えられないの。好きだった人のいやなところを見たくない。綺麗な気持ちでいたいし、綺麗な思い出だけ覚えていたい」
「だから、俺のことも思い出にしようとしている？」
冷たい声で問われた次の瞬間、タオルを奪い取られ、和香はベッドに押し倒されていた。唖然として総司を見上げる。
密室に二人きりとはいえ、彼がこんな行動に出るとは想像していなかった。嫌がる女性に無理やりなんて、最も嫌悪していそうなことなのに。
しかし、部屋に入ってからどこかとげのある態度だった彼は、今や剣呑な空気を隠そうともしていない。和香は負けじと睨みかえす。
「思い出にしようとしてるんじゃない。したの。私たちはもう五年も前に終わったでしょう」
突き放そうと硬い胸板を押す。だが、びくともしない。こちらの手を掴み、総司はやるせなさそうに口元を歪めた。
「確かに、終わらせるつもりだった。和香に会うことがなければ」
「どういう意味？　恋人に捨てられて傷心の元カノを慰めてくれるとでも？」
「……そうだな。お望みとあらば」
そこで不敵に口角を上げる。彼の本気が垣間見えて、和香は絶句した。
結婚していることを当てこするくらいのつもりだったのに――その薬指の指輪は飾りなの？
自分の知る総司は、決してこんな不誠実なことをする人ではなかった。不本意な結婚であったとしても、きちんと操を立てるような情け深い人だったはずだ。
――なら、目の前のこの男はいったい誰？
疑心暗鬼に陥りそうだった。

信頼していた恋人には二股されて裏切られ、思い出の恋人には不埒な関係を持ちかけられる。和香が大切にしてきたものは、いったいなんだったのだろう。
もやもやとした感情が、お腹の底から湧き出してくる。
暗い感情で、自分の内側がずぶずぶと沈められていく気がした。きらきらしていたはずの好きという気持ちが汚く澱んだもので塗りつぶされていく。
こうなるのが、なによりもいやだったのに。
綺麗なものを台無しにされることが一番つらい。
和香の中で、張り詰めていたものがぷつんと切れた。
「――だったら、慰めてよ」
低い声で言い放ち、彼の首筋にするりと手を這わせた。見下ろしてくる目がわずかに見開かれて、その表情にほんの少しだけ溜飲を下げた。
「慰めて、総司……」
甘えるような色をにじませ、涙に濡れた瞳でねだれば、ごくりと目の前の喉仏が上下する。
「いつの間に、そんな誘い方を覚えたんだ……」
「五年も経ったんだよ。いろいろ経験してるに決まってる」
煽ったのはわざとだった。
総司のあとに付き合ったのはたった一人だけのくせに、どうやったらこの男の冷静な仮面を奪えるのか、手にとるように分かった。
「違いない」
獰猛な笑みを浮かべた彼がブラウスに手をかけ、裾をスカートから引き抜く。その様子を眺めながら、このままめちゃくちゃにしてくれればいいと願った。
傷ついて傷ついて、どん底にまで落ちたら、あとは浮上するだけ。汚いものを洗い流すのだ。
やさぐれた和香の唇になにかが触れる。柔らかく重なるのは自分のものよりも少し硬い唇だ。
優しいキスは、昔と同じ。
もしかしたら、本当は変わったことなんてなにもないのかもしれない。
強がりなくせに和香は脆くて、総司はそんな和香を放っておけない。
口にする言葉ばかり大人ぶって、自分たちはなにも進歩していないのかもしれない。
大きな手が身体を撫で回しはじめて、とりとめのない思考は頭の片隅へ追いやられる。
「……っ」
思わず漏れそうになった声を吐息に混ぜて逃がした。
久しぶりの行為で想像以上に敏感になっていることを自覚し、表情を隠すように横を向く。眉をひそめてしまったのはほとんど無意識だった。それでも総司は目敏く気づいてしまう。
「どうした？　やっぱりやめるか？」
「やめるわけ、ないでしょ……」

冷笑交じりの問いかけに半ば反射的に言い返しつつ、眉間にこもった力を緩めた。
――こんなこと、全然大したことじゃない。
そう自分に言い聞かせて、動物的な行為に意識を集中させようとする。
本当は、彼と別れてからベッドをともにした男など一人もいない。付き合いはじめて三ヶ月になる矢野ですら、互いにタイミングが合わないまま身体の関係に進むことなく、あんな結末を迎えてしまった。
その直後に既婚者の元カレとホテルにいるなんて、冷静さを取り戻すとまたみじめな気持ちになる。
今はなにも考えず、激しい行為に没頭していたかった。
なのに、総司の触れ方はその口ぶりに反してとても繊細だ。衣服の裾から入り込んで腰回りを撫でる手も、首筋をたどる唇も、じれったいほど慎重で、優しい。
そのことに、胸が痛くなるような感情を呼び起こされそうになり、和香はたまらず自らブラウスのボタンに手をかけた。
「もしかして、遠慮してるの？　知らない仲じゃないんだから、好きに触ればいいのに」
挑発的な口調でそう言い、胸元に視線を落としてボタンを上から外していく。
しかし、すぐさま伸びてきた手が勝手な行動をとがめるように、ボタンにかかった指を押さえつけた。拘束から逃れようと手に力を込めると、さらに強く握られる。



「なにするの。離して」
視線を跳ね上げ、ぴしゃりと口にしてから、揺るぎない真っ直ぐな目に捉えられて息を呑む。見つめ合ったまま、重苦しい沈黙に耐えていると、やがて淡々とした声が返ってきた。
「そういうのは、いい。脱ぎたいなら俺が脱がせてやるから」
「そういうのって？」
「なんとなく……焦っているだろう」
湖面のような瞳に心の奥底までも見通された気がして、一瞬表情が強ばった。
「ちがっ……もの足りないだけ。もっと激しいのがいいの」
「激しいほうが好きなのか？」
「ええ」
「ずいぶん好みが変わったんだな」
「当たり前でしょ」
五年も経ったのだから。
和香が意図したのはその程度の意味合いだった。けれど彼は違ったふうに読み取ったらしい。
「――確かに、歪んだ性癖を持ってそうな男だったからな」
吐き捨てるような呟きはどうやら、駅で見かけた矢野を指して言ったもののようだ。矢野の性癖など和香の知るところではないが、総司が浮かべた苛立ちの表情は好都合に思えた。

「――そう。だから、こんな触れ方じゃ全然足りない」
緩んだ拘束から両手を引き抜くと、がっしりとした首に腕を絡める。
「もっと激しくして」
「断る」
こちらの精一杯の誘惑を即座に切り捨てつつも、それを口にする顔は限りなく無表情だった。目が不快そうにすがめられている。静かに怒りを燻らせているとき、彼はよくこんな顔をした。
瞬間的にひるんだ和香に与えられたのは、先ほどよりも濃厚なキスだった。貪るような口づけは情熱的ではあるけれど、やはり荒っぽさはない。丹念に唇と舌を味わい、口内を犯す巧みな愛撫に、身体から力が抜ける。
「……んっ」
上顎の真ん中を熱い舌先でくすぐられると、あえかな声が鼻に抜けた。
触れ合った場所から全身に広がる甘い痺れに、思わず身をよじる。そして悔しさが込み上げた。
――五年も経っているのに、どうして私の弱点をこんな正確に覚えているの？
単に記憶力がいいだけだ。そうに決まっている。
ちらりと脳裏をよぎった馬鹿な妄想は、なかったことにした。
総司はひとしきり和香の口内を味わい、思う存分翻弄して、ようやく上体を起こす。
「ほかの男なんて、知るか。俺は俺のやりたいようにする。遠慮はいらないんだろう？」



唇を濡らす唾液をぺろりと舐めとる仕草に男の色気を感じ取り、不覚にも胸が高鳴った。思わず頷いてしまうと、彼の動きは早かった。
はだけかけていたブラウスを脱がせ、下着からのぞく胸の谷間に口づけし、肉厚な舌が白い肌の上を這い回る。かと思えば、背中に手が回されて、平均よりやや大きめの胸を支えていた下着があっさりと緩んだ。
腕から肩紐を引き抜かれつつ乳房の先端を吸われて、お腹の奥に熱が灯るのを感じた。それを煽り立てるように総司の指や唇が柔らかな双丘を弄ぶ。
与えられる快楽に和香は素直に溺れた。
激しかろうと激しくなかろうと、理性を奪い去ってくれるのならどちらでもよかった。
たとえその手つきが、記憶の中のものと全く変わらない、懐かしさを覚えるものだったとしても。
邪魔な感情など頭から締め出してしまえばいい。
唇からあふれ出す声をこらえることもなく、ただ従順に、貪欲に、彼のもたらす甘い刺激に身を委ねる。
乳首を指の間でくりくりと転がされると、腰のあたりがひときわ強く疼き、羞恥心もかなぐり捨てて和香はねだった。
「そこ……っ、気持ちいい……もっとしてっ」
こんなはしたない台詞、人生で一度だって口にしたことはない。総司はギラついた瞳でこちらを

射貫くと、もう一方の乳首を口に含んで両方を同時に押しつぶした。
喉から高い嬌声がほとばしる。
そうしているうちにも彼の左手は肌を覆う布地を一枚ずつ確実に取り除いていき、ストッキングを剥かれてあらわになった太腿を卑猥な手つきで撫で回す。
そのとき、かすかな硬い感触が肌に引っかかるのを感じて、それが彼の薬指にはまる指輪だと和香は気づいた。
瞬間、舞い戻りそうになる理性を撥ねつけるように声を発する。
「それ、外してっ」
「それ？」
「指輪！」
「……ああ」
はっきりと告げると、総司はなんでもないことのように薬指からそれを引き抜いた。そのことに、こちらのほうが胸をざっくりと切られた心地がする。
そのリングが彼の指にはまっているという事実に、この五年間和香がどれだけ苦しんだと思っているのだろう。
そんな思考がかすめることすら今は煩わしい。
幸い、と言っていいものか、サイドチェストに無造作に指輪を置いた総司はすぐに戻ってきて濃



密な行為を再開した。だから、そのリングが和香の意識に影を落としたのはほんの束の間のことだった。
滑らかな手際でショーツを脱がされると、一糸まとわぬ姿が総司の眼前にさらされる。
その目が一瞬まぶしげに細められたのには、なにか意味があったのだろうか。
ふと浮かんだ疑問の答えを探している余裕はなかった。彼の指が、五年間誰にも許さなかった内側へそっと挿し入れられたからだ。
「ぁっ……んん……」
ぴくり、と肩を揺らし、すがるものを求めてシーツを掴んだ。
密かに心配していた痛みや違和感は全くない。感じるのは不思議なほど身体に馴染む心地よさだけだ。久しぶりだから、少々敏感になっている。気になったことといえばそれくらいだ。
「――んっ、はぁ……んぅっ」
無骨な男の指が繊細な動きで内部を探る。角度を変えるたびに卑猥な水音が室内に響く。しとどに濡れていることを知らしめられて、それにすら興奮を煽られてしまう気がした。
和香が唇を引き結んで感じ入っていると、秘筒をかき回すのとは別の指があふれた蜜をすくって花芽に塗りつける。途端に鋭い電流が体内を走り抜けて、びくんと全身が仰け反った。
「あぁっ！」
荒い呼吸を吐き出しながら、己のあまりの感度のよさに呆然としてしまう。いくら長らくこういっ

た行為から遠ざかっていたとはいえ、ここまで感じやすくなることがあるのだろうか。
そんな内心に生じた小さな動揺を落ち着かせている暇はなかった。総司が固く張り詰めた花芽とその裏側を指で挟み込み、さらになぶってきたからだ。
「――っ!!　――あぁあ、だめ!!」
目も眩むような快楽に貫かれて、目尻からぽたぽたと涙がこぼれた。自身の反応の大きさに恐怖すら覚える。和香は掴んだシーツにすがりついていることしかできない。苦しいくらいに乱れた呼吸の音が二人の間の空気を震わせる。
なのに、総司は攻めの手を一向に緩めようとはしなかった。それどころか、暴力的なまでの快感を生み出すその小さな突起をいっそう攻め立ててくる。
包皮を剥かれ、無防備に露出した陰核を直接擦られれば、腰が勝手にびくびくと跳ねた。痛々しく勃起したそれを指先でピンと弾かれると、圧倒的な熱の奔流が体内を駆け巡り、意識が飛ばされそうになる。
そんな容赦のない責め苦を延々と続けられ、和香はとうとう泣き言を漏らしてしまう。
「待って、そんなに強くしないで！　感じすぎるから……っ」
すると、秘所をまさぐる動きがぴたりと止まり、ホッと息をつく。
だがすぐに今度は胸の谷間にちりっと痛みが走った。
目をやれば、いつの間にそこに顔をうずめていたのか、総司が噛みつくような口づけを落として



いた。即座に声を出せずにいると、ちゅうっというリップ音とともに再度強く皮膚を吸われる。
「な……ど、どうして痕なんか……っ」
息も絶え絶えに非難すると、彼の目が滾るような怒気をはらんでこちらを向いた。
「こんな……ほかの男に開発されたのが明らかな反応を見せられて、気分がいいわけがない！」
口元を手の甲で拭いながら舌打ちまでされて、とんでもない言いがかりにわなわなと震える。
どうしてそんなことを総司に言われなければならないのか。
――まるで、嫉妬してるみたいじゃない。
違う、そんなはずはないと否定したかったのに、再び蜜壺に触れた手がさらなる刺激を送り込んできたせいで、思考は混濁する。
「あ……っ、待って！　ほんとうに、今日は……っ、身体が、おかしいの……っ！」
「言い訳なんてしなくていい」
端的に切り返されて和香は歯噛みした。
一方的に勘違いしておいて、なんて言い草だ。
それでも切なげに歪んだ顔を目にすると、文句を言ってやろうという気も失せてしまう。
次々に呑まされる嵐のような官能も自分に対する独占欲の表れなのかと思ったら、怒りよりも喜びがまさってしまう。そんなふうに感じるべきではないのに、ままならない己の感情に唇を噛みしめる。

目元に涙をにじませてひたすら体内で荒ぶる快楽の波に耐えていると、やがて膣内を苛んでいた指が引き抜かれ、ばさりと白い布地に視界を覆われた。それはすぐに取り払われ、代わりに目の前には広く逞しい胸板が現れる。

その刹那、熱いなにかが胸に込み上げるのが分かった。

脱いだワイシャツと肌着を総司がベッドの傍らの椅子に放る。皮膚の上からでもはっきりと分かる筋肉の動きが和香の目を引きつけて離さない。

昔の彼も決して貧弱ではなかったが、ここまで筋肉質でもなかったように思う。

――五年が経ったんだ。

唐突に、胸を突かれる思いで、理解した。実感してしまった。

今、目の前にいるのは、別れてから五年の月日を過ごした総司なのだ。

そのとき和香の胸中に湧き起こった感情は、寂しさでも悲しみでもなかった。――喜びだ。

だって、彼の未来の姿をこうして目にすることなんて、叶わないはずだった。

深い悲しみの中で手放したはずの未来。その一端が、今ここにある。

誰よりもそばで想い合っていた日々が突如鮮明によみがえり、嗚咽が漏れそうになった。

歯を食いしばってこらえていると、緩めたスラックスから屹立を取り出した総司が顔を上げ、互いの視線が絡み合う。

相手の覚悟を問いただすような強い眼差しが、あの頃の彼に重なった。



「挿れるぞ」

「あ……」

ぴたりと丸い先端が押し当てられるのを感じて、和香は処女のように身を固くする。それでも十分に濡れそぼったそこは、呆気ないほどすんなりと相手を受け入れてしまう。

ずるり、と己の内側を埋める充足感に全身の肌が粟立った。ほとんど無意識に高い啼き声を上げると、そこににじむ悦びの色を感じ取ったのか、腰をぐりぐりと押しつけられた。

「やぁっ……いきなり、そんなふうにしたら……っ」

「イク、とか言うなよ。まだ始めたばかりだからな」

「……っ」

情熱的な触れ方も、強い眼差しも、昔と全然変わらないくせに、口にする言葉は昔と違って全然優しくない。

五年が経った。体格が変わった。それ以上に――関係が変わってしまった。

なら、この胸に湧き上がる感情はいったいなんなのだろう？

終わった恋の残滓がかすかに疼いているだけだ。意味などない。無視してしまえばいい。

――本当に？

まとまりのない感情は身体的な感覚に凌駕されてかき混ぜられる。

ぐっと奥深くを穿たれて涙が出た。なんの涙なのかもう分からない。

力強い律動に揺さぶられながら、和香は胸の内で自嘲する。こんなにも高ぶってしまうくらいに、自分は総司との再会に感動していたのか。

自覚はなくても身体の反応は雄弁だ。彼に触れられるだけで、女の肉体は容易(たやす)く歓喜し、悦(よろこ)びの声を上げる。

己の上に覆いかぶさり、眉根を寄せて快楽に耐える男の顔を見上げた。こめかみから伝った汗がこちらの胸元に落ちてきて、たったそれだけのことに無性に胸がときめいてしまう。

その頬に触れたくて伸ばした手は、けれど迷って肩に回した。恋人でなくとも、情事の最中ならこれくらいの触れ方は自然だろう。

かつてないほど高揚していた和香は最奥を叩く抽挿にすぐに達しそうになった。そのたびに総司は絶妙に加減してこちらを焦らした。そんなことを何度か繰り返しているうちに彼にも限界が近づいてくる。

「く……」

かすかなうめき声が上がって、男の太い腕が和香を抱き寄せる。その直後、硬い先端がぐぐっと奥の行き止まりに押しつけられ、次の瞬間、収縮するような動きをお腹の奥が捉えた。

熱いものが広がるような感覚はイメージから来る錯覚だったのかもしれない。総司は避妊具をつけていたのだから。

和香は彼と同時に達していた。焦らされつづけたあとの絶頂はあまりにも強烈で、ふわりと身体が浮き上がるような多幸感を覚えたところで記憶はぷっつりと途絶えている。和香はそのまま気を失ってしまったのだった。

翌朝、和香は案の定頭を抱えていた。

ホテルの客室の洗面所は照明が明るく、沈んだ気分が浮き彫りにされる。あまり見たくもない鏡の中には目を真っ赤に腫(は)らした残念な女が立っていた。化粧は中途半端に剥げている。

最悪。

自暴自棄になっていたとはいえ、総司を自ら求めてしまった昨夜を思い出し、洗面台に手をついてうなだれる。なんて迂闊(うかつ)なことを。

いくら元恋人といえど相手は既婚者だ。たった一度でも不倫は不倫。感情的になっていたことは言い訳にならない。

しかも、行為の最中にやたら感傷的な気分になって、ひどくよがってしまった。穴があったら入りたい。あんなのはシチュエーションに酔っただけだ。そう自分に言い訳したくなる。

落ち込む気持ちにさらに追い打ちをかけたのは、丁寧にクローゼットにかけられていた衣服だった。昨夜は総司に脱がされてそのあたりに散らかっていたはずなのに、きちんとしまわれていたということは、和香が寝入ったあとに彼が片付けたのだろう。

そんなマメさをいつの間に習得したのか。奥様にしつけられたのかなどと勘ぐってしまうのは、

決して穿ちすぎではないと思う。しわのない袖に腕を通しながら、このうえなく申し訳ない気持ちになったのは言うまでもない。

ちなみに当の旦那様はまだ眠っている。この隙に立ち去るべきか、否か。先ほどからその二つの選択肢が頭の中をぐるぐると巡っていた。

しかし、その結論はあっさりと下されることになる。備え付けのアメニティで見つけたメイク落としで顔を洗っていたところ、ベッドルームで総司が起きだす気配がしたのだ。

もう逃げることはかなわない。肌の水気を拭き取り、見苦しくない程度に身なりを整えた和香は、覚悟を決めて部屋に戻った。

「あの……昨日は、ごめんなさい」

入り口から半身をのぞかせ、おそるおそる謝罪する。寝衣を身にまとった彼はこちらの姿を視界に捉えると、ベッドに腰かけた状態で固まっていた。しばらくして、はーっと長い息を吐きながら全身を脱力させる。

「帰ったかと思った……」

その呟きに、和香はどんな顔をしていいか分からなかった。

帰れるものならよほど帰ってやりたかった。だが、それはあまりにも不義理だと思ったのだ。

「一応、昨日は助けてもらったから……ありがとう」

迷惑をかけてごめん、というのは最初の発言とかぶるので呑み込んだ。



返ってきたのは「ああ」だか「うん」だか曖昧な返事だけだった。

総司はそれきり口元を手で覆い、朝日の差し込む窓へ顔をそむけてしまう。その横顔がどうにも苦虫を噛みつぶしたように見えて、もしかしたら自分が残っていたのはまずかったかと和香は不安になった。

――そうよね。不倫の事実は変わらなくても、顔を合わせずすっぱり別れたほうが後腐れなく一夜の過ちで済むもの……

きっと彼も昨夜の行いを後悔しているのだ。

「あの……私は、これで。お礼を言いたかっただけだから」

空気を読んで出ていこうとすると、総司が焦ったふうに立ち上がった。

「待て」

「え？」

動きを止めた和香のもとに彼が足早にやってきて手を伸ばす。しかしその手は、触れることを躊躇うように虚空をさまよい、やがてゆっくりと下ろされた。代わりに、荒っぽい手つきで自身の前髪をかきあげる。あらわになった眉間には深いしわが刻まれていた。

「総司……？」

怪訝に思って顔をのぞき込むと、ややあってから意を決した強い眼差しで見つめ返される。

「和香、その……これからも、こんなふうに……会って、くれないか」

瞬時に意図が掴めなくて、和香は真顔になった。
こんなふうに。それは、昨夜のような行為をこれからも続けていきたいということだろうか。
理解が脳の中心に達すると同時に、身体が強ばった。
「なにを、言ってるの……？」
そんなのダメに決まっている。それはもう過ちですらなく、本気の不倫だ。道理から完全に外れてしまっている。総司だって理解しているはずだろう。
しかし彼は、こちらの反応など分かりきっていたかのように、ただ薄く苦笑するだけだった。そうして沈痛な面持ちで口を開く。
「やっぱり、俺は……君のことが、諦められない。好きなんだ、和香」
好き。
甘いはずの響きが、まるで別物みたいだった。
その声が頭の中で何度もリピートする。けれど、それをどう受け止めていいのか分からない。呆然として頭がうまく働かなかった。
「好きって……なに？　あなたにとってそれは、別の人との指輪をはめていても口にできる言葉なの……？」
浮かんだ疑問をそのまま口にすると、総司は苦しげに表情を歪めた。
「だったら、なんて言えばいい。離婚……する、と、言えばいいのか？　そんな口先だけの約束を、君は信じるのか？　和香なら……俺の気持ちが分かるんじゃないのか」
卑怯な言い方。
和香なら。そんなふうに言われれば、無理やりに引き裂かれた失恋の記憶がまたずるりと引き出されてしまう。
二人が積み重ねた苦悩と葛藤。そして、どれほど自分が彼を愛していたか。
夕べ重ね合わせた肌にはまだ、熱く抱き合った感触が生々しく残っている。それに手繰り寄せられるように、思い出の中の感覚や感情が再び現実の色を取り戻していく。
総司の気持ちが、痛いほどよく分かる。
和香だからこそ、分かってしまう。
でもダメだ。それは、分かってはいけないものだ。
彼の目がすがるように和香を見つめている。その頬に触れて、抱きしめてあげたい。そうできたらどんなによかったか。だけど――
「ごめん……総司。私は分かってあげられない……ごめん……」
震えそうな声で告げると、見つめ合った瞳に失望の色が広がっていく。それを悲しい気持ちで眺めた。
こんなことで、彼に道を踏み外させるわけにはいかない。二人の真っ直ぐだった恋に汚点を残すこともしたくない。だから突き放すしかなかった。

ごめん。きっと何度言っても足りない。拒絶して傷つけることしかできないなら、もっと徹底的に総司を避けるべきだった。油断なんてしてはいけなかった。今さら後悔しても遅い。

今の自分にせめてできることと言えば、すみやかにこの場から姿を消すことくらいだ。

「ごめんなさい……本当に、さよなら」

「和香！」

名前を呼ばれたけれど、彼がそれ以上の行動に出ることはなかった。バッグを手にした和香は半ば走る勢いで客室を飛び出し、黙々とエレベーターを目指した。

ホテルのエントランスを出て五歩くらい進んでから、ようやく背後を振り返る。

予想どおり、昨日のように追いかけてきているなんてことはなかった。ロビーを行き交うのはホテルマンと、チェックアウトや朝食に向かう宿泊客だけだ。

きらびやかな内装や人々の洗練された振る舞いから、普通のビジネスホテルよりもいくらか格上なのが察せられた。

そう、総司がいるべきなのはこういう世界。お金や肩書きがあるとかではなくて、教養や品性を備えて人々の先頭に立つ人なのだ。

だから、後ろ暗いことなど抱えずに、常に堂々と明るい道を歩んでいてほしい。彼のそういうところに和香は惹かれたのだから。

自分の考えを自覚して、くすりと悲しい笑みがこぼれる。



「結局、たった一晩でひっくり返されちゃったな……」

五年かけて消し去った想いは、実際のところ全く吹っ切れていなかったらしい。

込み上げる寂しさを胸の奥にしまい込み、そっとホテルをあとにした。

「矢野さんはそういうタイプだったかあ……。やっぱり和香に一言でも注意しておけばよかった」

一度自宅に戻ってからショップに出勤した和香がひととおりの説明を終えると、共同経営者であり、長年の親友でもある有紗（ありさ）は憤（いきどお）りもあらわに顔をしかめた。

店内に客の姿はなく、二人はそれぞれに商品の陳列や整理で手を動かしつつ雑談に興じている。

有紗の溌剌（はつらつ）とした印象の顔立ちには悔しげな色がにじんでいた。しくじったとでも言わんばかりのその反応を和香は不思議に思う。

「注意って、有紗は知っていたの？　私はとてもショックだったんだけど」

「それは……うーん、別に分かってたわけじゃなくて。ただ、なんとなく胡散臭（うさん）いなーって思ってたの」

「胡散臭（うさん）い？」

矢野の普段の様子を思い返し、やはり首を傾げる。あの裏切りさえなければ、彼は穏やかで優しく、かなり好感の持てる男性だったと思う。仕事も丁寧だった。今となってはむしろ、仕事だけは、と言うべきかもしれないけれど。

「ほら、矢野さんって大人っぽい色気があるし、女性の扱いもそつがないでしょ。ああいう男性は黙っててもの女の人が寄ってくるはず。なのに、三十代で結婚の気配もないし、恋愛に消極的になってた和香にわざわざ手を出そうとするあたり、クセ者の匂いがするなあって」
「なるほど……。私、疑いもしなかった」
確かにあんないかにもモテそうな男性が一途に何年も自分だけを想ってくれるなんて、話がうますぎる。
大失恋のせいで恋愛に前向きになれないのだとは、最初に口説かれたときに軽く伝えてあった。けれど矢野は、和香がそろそろ次の恋に向かうべきだと気持ちを持ち直すまで一度も急かすことはなかったのだ。
その態度がこちらの目には余裕のある大人の男性に映っていたわけだが、真実が発覚してしまえばなんてことはない、彼は和香にそこまで惚れ込んではいなかったのだ。昨夜のあの様子では、彼が関係を持つ女性があの一人だけなのかも怪しい。
総司のことを吹っ切ろうと焦って視野が狭くなっていた部分もあったのかもしれない。
思えば、矢野が褒めるのは和香の無機質なまでに整った容姿ばかりだった。紳士的な振る舞いと細やかな気遣いに誤魔化されていたが、彼も容姿目当てで近づいてくる男たちと同類だったのかもしれない。そういう相手を見分けるすべは学生時代にとうに身につけたつもりでいたのに。
自省する背中を、隣にやってきた有紗の手が優しく叩いた。



「それはしかたないよ。私だって確信がなかったから言わなかったんだし。悪いのは百パーセント向こうなんだから、和香が自分を責める必要はないよ」
「……うん」
「二股しておいて悪びれもしないって、相当クズでしょ。早めに分かってよかったくらい。気づかず付き合いつづけてたらどれだけ時間を無駄にしてたか」
清々しいくらいのポジティブシンキングだった。
十三歳のときにイギリスのインターナショナルスクールで知り合った二人だが、海外の暮らしが合わず三年ほどで日本に戻った和香に対して、有紗は子供時代の半分を海外で過ごしている。そのためか、思考が合理的で思い切りがいい。優柔不断なところのある和香は、彼女のこういう割り切り方にいつも感心してしまう。
「でも、仕事では迷惑かけちゃうよね……」
矢野も自分たちと同様にアンティークディーラーを生業にしている。彼のほうは、店舗を持たず、仕入れたアンティークを業者相手に売る旗師という業態をとっていた。国内のアンティーク事情にも詳しいので、二人にとっては商品の仕入れ先の一つであるとともに、ショップ経営のよき相談相手でもあった。
別れたからといって、仕事上の関係まですぐに切ってしまうわけにはいかない。けれど、有紗はにっこりと微笑むと、あとの対応は全部私がやるから安心して、と頼もしく請け負う。和香は負い

目を感じつつも結局それに甘えるほかなかった。
「それより問題は宗像さんだよ。五年経ってそれってことは、和香に相当未練があるんじゃない？」
すっかり話が終わったつもりでカウンターのノートパソコンを開こうとしていた和香は、指摘されて目を瞬く。そして戸惑い気味に視線を逸らした。
「そう、なるのかな……」
語尾を曖昧に濁しながらも、実際そのとおりであろうことは理解していた。
「もしかしたらまたコンタクトとってくるかも。いくら普段は東京で勤めているって言っても、新幹線を使えば大した距離じゃないし」
具体的な交通機関を提示され、往復にかかる時間をうっかり計算してしまう。土日を使って行き来するとしたら、全く問題にはならない距離だ。店という場所がある以上、和香は逃げ隠れできない。
あんなことがあったのだから、もう絶対に総司と関わることがあってはならない。けれど、現実問題として彼が本気で接触しようとしてくれれば、それを防ぐ手立てはなかった。
ホテルを出るときは、とにかく離れなければという一心で総司を突き放すことができた。だが、和香の中には五年を経てもなお消えずに残った彼への愛情がある。
久しぶりに目にした昔の恋人は記憶の中よりも大人びて、逞しくなっていた。その表情や仕草を頭の中に思い描くだけで、鼓動がひとりでに速まっていく。懐かしさすら覚える恋の感覚。
愛しい思いを自覚した今、自分はどれだけ毅然とした態度を保っていられるだろうか……



「和香？　大丈夫？」
状況の悪さを認識して軽くめまいを覚えていると、有紗が気遣わしげに顔をのぞき込んできた。
「う、ん……ちょっと、まだ驚きから抜け出せてないみたい」
控えめに言い繕った和香に対し、彼女はすっと真面目な面持ちになる。
「関わっちゃダメ。……って言うのは簡単だけどね。和香にとっては大切な人だし、実際に顔を合わせたら情に流される部分もあると思う。でも、線引きだけはちゃんとして。不倫するつもりがないなら」
「……うん、分かってる」
思いやりに満ちたその忠告を、和香は真摯に受け止めた。
もうあんな過ちを犯してはいけない。呼び戻された恋情がつらい痛みを訴えても、総司をきちんと拒絶する。そう心に決める。
彼の告白を聞いたとき、なりふりかまわず抱きしめてあげていたなら、互いのぬくもりに幸福を感じることができたのだろう。
けれど彼の手に指輪がある限り、それは一時的なものに過ぎない。それでは意味がないのだ。
守りたいから突き放す。そういう選択をすべきところなのだと思う。
私は大丈夫。
周囲を見回せば、傍らには付き合いの長い親友がいて、小さいながらも自分たちの店がある。大

立ち読みサンプルはここまで

好きなアンティークに囲まれて過ごせる今に和香は満足している。
総司とは二人で幸せに過ごせた時間も確かにあったのだ。その思い出さえあればいい。
そう自分に言い聞かせようとした和香は、しかしふと親友の薬指に光る指輪に目を留めて、自分の表情が強ばるのを感じた。
資産家の娘である有紗には、見合いで決められた婚約者がいる。名家同士を結びつける目的の結婚だが、当人同士は幼い頃からの顔見知りで、仲も良好だ。
和香は思わず、己の左手を押さえた。なにもついていない空白の薬指。
三十歳を目前にして、結婚に対する焦りは別段いだいていなかった。だがそれは、独り身でも平気だという意味では決してない。恋愛すらままならない今の状況で、その先にある結婚というものを自分とうまく結びつけられずにいただけだ。
けれど、有紗には、生涯をともにする人がいる。
――総司にだって。
この先の人生、彼らの隣にはずっとその相手が寄り添うのだ。
嫉妬にも似た孤独感が、唐突に胸に込み上げる。
不穏にざわつく感情を和香はぐっと呑み込み、ただ黙って左手を握りしめた。



## 回想Ⅰ『はじまり』

感情を表に出すのが苦手で、上手に人を頼れない。それは昔からの和香の欠点だった。
三姉弟の長女として育ち、幼いときから我慢することには慣れていた。高校に入学すると、親元を離れて祖父母と暮らすようになったので、周囲を煩わせないように平気な顔を取り繕う癖はますます強固になった。
同世代の友人たちは、年齢を重ねるにつれて自分の世界を広げていく。一方の和香は、本音を閉じ込め、漠然とした孤独をいつも抱えていた。
思えば、そんな寂しさに気づき、癒してくれた唯一の存在が総司だったのだろう。
数多くいる同期の一人だった彼をとりわけ意識するようになったのは、株式会社宗像百貨店に入社して三ヶ月ほどが経ったときのことだ。
新人研修が終わり、同期たちがそれぞれの部署に散ってしばらくが過ぎた頃。和香は配属された宣伝部で、一日でも早く仕事を覚えようと日々努力していた。
けれど、自分がほかの同期と違っていたのは、クリエイティブ職という特殊な枠で採用されたという点だった。要するに和香は、外注するまでもない社内のデザイン業務を一手に引き受けるイン